協議会だより

全国合宿研究会を開催しました

全国学童保育連絡協議会（以下、全国連協）は、毎年、その年の全国学童保育研究集会（全国研）の開催地に全国連協を構成する連絡協議会が集まり、全国合宿研究会（以下、合宿研）を開催しています。二〇二六年五月九日・一〇日、会場を山形県内に設け、オンラインも併用して「子どものいない時間の仕事から、指導員の専門的な力量を考える」をテーマに第五四回合宿研を開催しました。その概要を報告します。

はじめに全国連協から、合宿研の歴史について話しました。主な内容はつぎのとおりです。

一九七三年に開催された第一回合宿研のテーマは、「①学童保育の原点と運動論」「②学童保育の制度化について」。このまとめをもとに、一九七八年に開催された第六回合宿研で「①学童保育の原点と制度化の内容」「②学童保育の指導内容」について議論し、その内容が全国連協編の冊子『学童保育年報 No.1』として刊行された（一九八五年）。

当時から合宿研は、そのときどきの課題や活動方針にもとづいて、全国連協を構成する連絡協議会が集まる全国会議のなかでテーマを決定し、各地域の連協の代表が集まり、議論を深め、その到達点を月刊『日本の学童ほいく』や刊行物を通じて全国各地の運動と共有する場として位置づけられていた。そして、「地域の状況を考慮して全国連協が参加人数を指定」「合宿研の四、五か月前の全国会議でテーマを決定」「各地域連協内での事前討議を経て、一〇地域ほどが文章報告を提出」「合宿研当日を迎える」という流れで進められていた。

＊　＊　＊

このたび行われた第五四回合宿研の趣旨と提起はつぎのとおりです。

◆指導員は、子どもや保護者と直接関わることとあわせて、子ども理解を深めるために、「保育内容の記録」「保育の打ちあわせ」「保育計画（見とおし）の作成とふり返り、まとめ」「情報共有の会議や、保育内容に関する事例検討」「関係機関や地域との連携・協力」など、多岐にわたる仕事に連携・協力しながら取り組んでいる。

◆私たちは、指導員の勤務時間には、子どもと直接関わる時間のほかに、「子どもの様子や指導員の関わりをふり返って翌日につなげる時間」「子ども観・保育観について同僚との間で相互理解を図る時間」を含めることが必要であることを、折々の機会にたしかめあってきた。

◆このたびの合宿研では、「子どものいない時間の仕事」の実態を交流し、その仕事が子どもや保護者との関わりを支えていること、指導員の力量形成につながっていること、力量形成に資する仕事を確立するための条件整備、保育実践を確立していくことについて考えあい、運動の課題などについて明らかにする。

まず、「指導員体制と雇用」について現状整理を行いました。これは、参加者の立場、学童保育に関わってきた年数などがさまざまなことをふまえて、現状について共通認識を図るためです。主な内容はつぎのとおりです。

＊国は、非常勤職員が前提の体制から、「常勤職員の配置」を促進することを、予算面で誘導している。しかし、子どものいる時間のみに配置している市町村や学童保育現場も未だに見られる（＝子どものいない時間の仕事が確立されていない）。

＊国は開所時間を「児童を受け入れることができる時間」と整理している（市町村や学童保育現場では、理解がまだ十分ではない様子が見受けられる）。

＊　＊　＊

そして、学童保育指導員に求められる専門的な知識と技能について再確認し、力量を形成していくために「知識や情報を得ること」「目の前の子ども・保護者から学ぶこと」とあわせて、「子どものいない時間の仕事」、とりわけ「記録とふり返り、打ちあわせと職場づくりに取り組むこと」に焦点をあてて、今回の合宿研で議論したいことを提起しました。

つづいて、岩手県学童保育連絡協議会と横浜学童保育連絡協議会からのレポート報告報告、参加者との質疑応答を行いました。

その後、参加者は会場・オンラインに分かれて、一日目は主に「現場実践」に関わって、二日目は主に「条件整備や運動の課題」に関わって、議論を深めました。

議論の柱立ては、「子どものいない時間の仕事、とりわけ力量形成に資する仕事が、子どもや保護者と関わるときに重要であると実感したこと」「記録とふり返り、打ちあわせと職場づくりの実態と課題」「力量形成に資する仕事を確立するため、正規職員化や勤務時間の設定など、理解を得るために根拠としたこと、働きかけ」「大規模化、施設環境、運営主体の変更、勤務時間や勤務体制、指導員配置、指導員同士の連携などの実態と課題」「専門的な力量を高める、学童保育・連絡協議会の活動に関わりつづけるうえで、大切にしていること、支えになっていること」などです。

議論のなかでは、「子どものいない時間帯の仕事のなかで、実施主体である市町村などから理解が得られにくかったことはあるか、どのように理解を得たか」との問いに対し、「理解が得られにくかったのは、子どもたちの生活の様子や指導員の関わりを伝える『おたより』の作成について。しかし、保護者の声が後押しとなって、理解が得られた」と地域の経験が語られるやりとりもありました。

また、子どもの様子や指導員の関わりを〝記録し、伝える〟ことについては、「指導員自身が子どもに対して威圧的であることに気づいていなかったが、記録をするなかで追いつめていたことへの気づきがあった」「おたよりを書くこともあり、身を削るような作業でもある。しかし、自らのケアにもなった」という積極的な意見がされる一方で、「『書くことが苦手』という場合には、『簡素化してもいい』と言っている。厳しいことを言うと退職してしまう」と消極的な意見も出されて、議論の進行担当者が葛藤し、逡巡しつつも「やはり、書くことは必須だと思う」と伝える場面もありました。

＊　＊　＊

全国学童保育研究集会（以下、全国研）は、広く一般に開かれた研究集会であり、多くの人に参加を呼びかけ、交流を第一義的に行うものです。一方、合宿研は参加対象を「全国連協を構成する連絡協議会関係者」に限定して、一つのテーマを集中的に議論し、理論を構築していくことを目的としています。そして合宿研での議論を、全国研での交流につなげていきます。今回の合宿研では、二〇二六年度の全国研開催地・山形から六〇名を超える方々の参加がありました。合宿研の議論の熱気にふれ、全国各地からの参加者とも交流し、全国研当日の再会を約束する声も聞かれました。第六一回全国研の準備状況については、本誌五一ページもあわせてごらんください。